の素朴な手法との渾一融和がかなりなまでに適切である。更に内に藏する詩情が程度よく壓縮されて表出されてゐる。これらの條件がこの歌の價値を決定したものである。これを前出の『子ねこ』と比較するならば、藝術的迫眞力の强弱が容易にうけがはれるであらう。それは決して題材の相異に起因するのではない。山を、川を、都市を、田園を、プロレタリアをブルジョアを、失業者を、搾取者を、人を、石を――それらのあらゆる事物現象の何を取るかは作者の隨意であり、それが詩の價値を決定することにはならない。要はその作品の根柢に脈うつ正しき情熱であり、詩情であり、理想であり、體驗であり、態度である。

二、指導の實際

第一時

1 讀みの練習
2 文意の把捉
3 語句の意味

4 鑑賞の大要的取扱

第二時

(一) 二三回讀ませる。
(二) 一の歌二の歌の意味を問答する。
(三)『田園の自然』『働く親子の樣子』『夕方の情景』を想像して各自に書かせる。

例

a 田園の自然

ひろいひろいたんぼです。むかふの村の木も、こちらの山の木も赤くいろづいてゐます。田のくろのならやくぬぎも黄いろになつて、つめたい北風に吹かれてゐます。ほんとにつめたい風です。びゆうつと音をたてゝ吹くと、木の葉がひら〳〵と散つていきます。

b 働く親子の樣子

お父さんは四十くらゐです。まつ黒な强さうな人です。ほゝかぶりをして、

きれのあたつたこんの股引をはいてゐます。水ばなが出るので時々はなをすゝつてゐます。子供は十六七です。はんてんを着て、やつぱりほゝかぶりをしてとても元氣さうです。ふたりはわきめもしないで、せつせとはたらいてゐます。

c 夕方の情景

ひぐれです。からすが森へとんでいきます。夕やけがまつかです。山も、たんぼも、二人も、みんなまつかです。

『やれ〳〵すんだ。』と、おとうさんはこしをたゝきながら、子どもと顔を見合せてにつこりしてゐます。

(四) 各兒童の想像文を發表させ、本課と適當に結びつけて其内容を一層深める。

(五) 三四人に讀ませる。

その五　私のうち　(國語卷五)

もえる木のめに春風吹けば、

うちのまはりのうめ・もも・さくら、
かはる〳〵に花ときみだれ、
人も來て見る、小鳥もうたふ。

うちの前には小川が流れ、
舟もうかべば、あひるもうかぶ。
つりも出來るし、およぎも出來て、
あつい夏でもすゞしくくらす。

つゆや時雨が色よくそめた、
うらの小山に秋風吹けば、
木々のしづくもきのことなつて、
ばんのごはんのおかずにまじる。

松をのこして木の葉がちれば、
庭は一日日がよくあたる。
本のおさらひすました後は、
枝につるしたぶらんこ遊。

一、教材について

四季折々の美しい自然天産遊びによつて自己の幸福な生活をうたつたもので、一は春、二は夏、三は秋、四は冬である。

かなりに兒童生活の眞實へ、迫眞力を持つてゐるのはよい。ぐつとくだけたメロデーが、情緒の流れに合致してゐるのもよい。が、硬化した概念の普遍であることは矢張り飽き足りない。

例によつて、この教材を生かすべき方面からの鑑賞的批評を加へる。

淡綠の木の芽に春風が訪れると、家の周りの梅が咲く。つゞいて桃櫻とかはる〳〵に花が咲き競ふ。この花の並べ方にも、季節的の推移が表示されてゐる。

『もえる木の芽に春風吹けば』自然な、ものやはらかなタッチである。いろ〳〵の花が咲きさかると、鶯も來る。四十雀も來る。『やあ、咲きましたなア』と、お隣の爺さんも煙草入をさげてにこ〳〵縁側に腰を下す。種々内容上の補説をあげて、のどかな田園情緒を具象すべきである。

やがて夏が訪れる。前の小川が一倍澄んでくる。底の小石の數も讀めさうな

美しい流である。冷たい水である。河鹿もなく。あひるも泳ぐ。舟も浮べられるし釣も出來る。かうした樂園であればこそ、夏の暑さも忘れるわけ。

秋——

黄に紅に染つた裏の小山に、秋風が吹くころは、しめぢ、しひたけ、松たけが香ばしくかほる。『木の實拾ひ、きのことり』何としても秋の行樂の最上である。その上友達四五人も打連れて愉快に採り集めた茸が、母の手に調理されて夕餉の膳にのぼるのである。

うすら寒い風から、膚を刺す北風——やがて冬になる。松をのこして木々の葉が散り果てる。しかしこの家には一日暖い陽があたる。陽ざしを南の窓の机にうけて、勉强を濟ました後は、背戸の木の枝に吊したブランコにぼか〳〵と背をあたゝめる。

春の花、夏の川、秋のきのことり、冬のぶらんこあそび、それ〴〵季節にふさはしい代表的なものであらう。

この作品は、自身の周圍にある自然の美を、天産を、遊びを滿足し、喜び、感謝してゐ

ることに中心がある。取扱ひにあたつても、そこを基脚としなければならない。

二、指導の實際

(一) 自由讀

(二) これをよんでどう思ふか。

(兒) 大へん樂しさうだと思ひます。

(兒) こんなところへ住んでみたいと思ひます。

この子供はどう思つてゐるだらう。

(兒) やつぱりよいところだと喜んでゐます。

何をよろこんでゐるか。

(兒) 美しい景色や、いろ〳〵の產物や、面白い遊戲をです。

(三) どんな美しい景色や、よいことがあるか、一つ調べて御覽。

――――各自に默讀させる。書き拔かしてもよい。――――

(四) 兒童の調べたことを、問答により次の如く板書しながら整理する。

(五) 朗讀四五人。

第二時

1 第一時の取扱をうけて、更に想像を擴大し一層內容を深くする。

2 歌ひ上げた各季節に於ける事實の適切さの檢討。

3 語句・文字について。

その六　なぎ　（國讀卷六）

空もみどり、
海もみどり、
空につゞく海のみどり、
海につゞく空のみどり、
すみきつて、
がゞみとかゞみ。

沖ものどか、
濱ものどか、
沖へ急ぐ兄の小舟、
濱へ歸る父の小舟、
すれ合つて、
ゐがほとゐがほ。

一、教材について

紺青に澄み切つた海を背景にして、平和な漁村生活の一面を描いたもの。大まかな筆致のなかに、環境を樂しみ、生活に滿足し、父を思ひ兄を思ひ子を思ふ父子兄弟のなごやかさがしみ〴〵と漂つてゐる。説明的のものでありながら、説明と氣づかせないところにこのうたを高く買はせる詩境がある。殊に『すみきつてかがみとかゞみ』『すれ合つてゐがほとゐがほ』などの句は、複雜な情景を單的に壓搾し洗練してゐる。

海ものどか、空ものどか、紺青の空と海とが彼方の涯まで連り連つて、寂として展開された眺望は幽美であり、柔和であり、親愛である。水天彷彿青一髮――とは丁度かうした日の叙景であらう。

そののどかな海をバックとして忽然と點出された一情景。『沖へ急ぐ兄の小舟、濱へ歸る父の小舟、すれ合つてゐがほとゐがほ。』長閑な感を一層のどかにした自然と人情との交錯美である。

沖へ急ぐ兄の小舟
濱へ歸る父の小舟

無言のうちに笑みかはした瞬間――舟はもう、さッと一二間も漕ぎ離れて、あとには一條の白波路。

颯爽と赤銅色に燃えた腕たくましい二人の漁夫、濱遠くこれを眺め入る少年の姿、小曲風の味をほのめかしたよい作である。

長短句を取り合せ、或は名詞止を用ひ、六六音を主體としたなど手法上の苦心も見るべきものがある。働き盛り元氣盛りの兄が、これから夜釣にでも出かけ、いさかか年とつた父は晝間の仕事を終へて、家に歸るといふ風に取組んだのも自然である。

二、指導の實際

(一) 自由讀

(二) これは海のどんな時をうたつたものか。

(三) これを讀むとどんな氣持がするか。

(兒) しづかです。

(兒) 氣持がよい。

(兒) 平和です。

(四) 空と海の樣子をどう書いてあるか。

(五) 父と兒とのゐがほの中には、どんな氣持がふくまれてゐるか。

(六) 朗讀四五人。

(七) 問答

1 作者はどこにゐるか。

(兒) 海岸に立つてゐるのでせう。

2 兒はどんな心持で沖へ漕いでゐるのだらう。

3 父は……

4 二人は何故すれあつた時、につこりしただけで何ともいはなかつたのだらう。

(八) 朗讀二三回

(九)『しけ』と比較對照させる。

風

ひゆつとうなつてゐる。

すみきつて鏡のやう。

空

鉛色の空は次第に低くなつて來ます。

空もみどり、海もみどり、

濱

うちよせて來る波が岩をかみ、小じやりをとばす。

のどか。

沖

舟一そうも出てゐない。汽船も通らない。汽笛も聞えない。

のどか。小舟。

漁師

『これが五日もつゞくとひぼしだ』とこぼしてゐる。

ゐがほとゐがほ。

(一〇) 音讀二三回

(一一) 問答

1 なぎの海の、よい氣持がどこに表はれてゐるか。

2 人々の心持が、どこに表はれてゐるか。

第二時

1『しけ』と『なぎ』とを比較し、『なぎ』の美しさや氣持よさを一層深めると共に、表現上の差異特質を探る。

2 語句の練習。

3 新字の取扱。

4 全文の視寫練習。

5　改作・應用練習・その他。

その七　初夏の夜　（國讀巻七）

なはてづたひに來る風も、
若葉のにほひかんばしく、
空一ぱいの星は皆、
凉しく金にまたゝけり。

田の面は水の廣々と、
蛙の聲もにぎはしく、
谷あひの家窓あけて、
夜に親しむ時は來ぬ。

一、教材について

初夏――その語感からして颯爽たる響をもつ。一面の新綠、牡丹が匂ふ、藤が咲く、芍藥が赤い。卯の花がこぼれる。菖蒲湯だ、あやめ酒だ、黑鯉がうまい、馬鈴薯がふとる、筍が出る、燕がとぶ、李の花が白く、柿が青々しげる、ほとゝぎすが鳴く――と

清新なもののみが展開する。さうしてそれらのうち最も深い印象と感銘をもたらすものは、何としても若葉であらう。百花燎亂の優艶美から男性的更生の夏へ……野も山も一望の綠、全く壯美である。

殊に初夏の夜に至つては、解放と自由と清爽の歡喜が躍る。

一日の汗を野風呂に流して、ぶらりと戸外へ出る。繩手づたひに吹く風は眞に凉味萬斛、そこにはそこはかと甘い若葉の香が漂ふ。仰げば一點の雲もない紺碧に、金砂子を撒き散らしたやうな無數の星が神祕的なさゝやきを送る。

足許からずつと彼方までつゞく一面の田。そこには此頃やつと植ゑた苗が行儀よく薄明りに並んで、一ぱい滿された水がきら〳〵星の影を搖る。視線を外らすと、うす黑く並んだ山々、その山峽に見える二つ三つの灯。すつかり窓を明け放つてゐる。この惠まれた初夏の夜に親しんでゐるのであらう。

終始叙景を主體として、初夏の夜の自然美を讃歎したものである。

が、これは編者の意圖する十分の一も恐らく子供には共鳴を持たれないであらう。編者が期待する感激の最小限度すら彼等には起きないであらう。その理由

は誰しもが既に承知するところで、このうたの取材において、詩術において、餘りにこの學年程度の兒童生活に隔りがある。彼等の詩境の彼方のものである。論より證據彼等に『初夏』といふ題材から想ひ浮ぶものを語らしてみるがよい。初夏の題下に綴らしてみるがよい。恐らくかやうな素材と、かやうな低徊趣味的な大人くさいものはひとりとして持ち合はさないであらうから。

二、指導の實際

第一時

1 讀みの練習。

2 『なはて』『かんばしく』『またゝく』『金にまたゝけり』『谷あひ』『夜にしたしむ』などの語意を授ける。

3 大意を汲みとらせる。

第二時

(一) 朗讀二三回

(二) 問答

1 作者はどこにゐるか。

(兒) 田圃の畦道を散歩してゐるのでせう。

2 このうたを書かうといふ心になつた動機は何か。

(兒) 初夏の夜のすが〳〵しい氣持です。

3 どういふ材料を選び出してゐるか。それがどういふ感じを與へてゐるか。

板書する

風——氣持がいゝ
若葉のにほひ——かんばし
星——涼し
田の水——廣々
蛙の聲——にぎはし
谷あひの家——夜に親しむ

(三) その事柄が與へた感じが、目だけではなく、耳や皮膚やいろ〳〵のものを通

して來てゐる。今、それを表に書いてごらん。

――――板書――――

目――星　田の面の水　谷あひの家

耳――蛙の聲

鼻――若葉のにほひ

(四) 事實が感覺器官を通して、ある感じを與へ、それらの感じが統一されて、一つの詩の根柢想を作ることを話してやる。

(五) 朗讀二三回

(六) このうたを繪に表現させる。

その八　町の辻　（國讀卷八）

雪どけ道のぬかるみを、
杖にすがりてとぼ〳〵と、
歩み來れる老婆あり。
ゆききの車馬のたえざれば、

向ふの側へ行きかねつ。
老婆の前を右左、
行きかふ男女多けれど、
北風寒き町の辻、
身なりいやしき老婆には、
手をかす人もあらざりき。

米屋の小ぞうお得意へ、
米を運びし歸り途、
ひらりと下りて自轉車を、
角の下駄屋にあづけ置き、
すぐに老婆をみちびきぬ。

『年の若きに感心な。』
かくいふ聲を後にして、
小ぞうは乘りぬ自轉車に。
國に母をや殘すらん、
彼のまぶたにつゆあり き。

下駄買ふ人も賣る人も、
下駄屋にありし人は皆、
彼の姿を見送りぬ、
さとすべき子にさとされし
小さき悔をいだきつゝ。

一、敎材について

事實卽詩ではない。それが如何程切實な事件にしろ、如何程作者を感激せしめたにしろ、その事實、その事件をそのまゝ或るリズムを借りて表現したとしても決して詩にはならない。このうたはその例として擧げ得られる。これには道德的敎訓的の意味を讀者に與へようとする作者の意圖が働きかけてゐるだけで、そこには毫も詩性が働いてゐない。熾烈な情緒の燃燒が、事件を詩的に淨化してゐない。したがつて詩的感銘といふものはない。『成程感心な小僧だ』といふ、事實を通しての感銘はあらう。が、それと、今いふところのいはゆる『詩』の特異がもたらす感情の高揚とは趣を異にする。要するにこれは叙事詩的の形式を借りた事實

の說明であつて、すぐれたうたといふことは出來ない。例によつて一應の補說的檢討を試みよう。

まづ場所を考へてみる——

かなり繁華な町の四つ角である。自轉車・馬車・人力車・自働車などがひつきりなしに通る。その上人通りも多くて混雜してゐる。道は雪どけでひどいぬかるみである。うつかりすると達者なものでさへ下駄をとられさうだ。その四辻の一方の角に下駄屋がある。かなり間口の廣い店で、店員も二三人居り、お客も四五人入つてゐる。

次に時を考へてみる——

冬である。朝から晴間を見せない灰色の雲が一面に覆ひかぶさつて、身を切るやうな北風が、びゆう〳〵吹きまくつてゐる。男は外套の襟を高く立てゝ水鼻をすゝつてゐる。女は襟卷に深く顏を埋めてちぢこまつて歩いてゐる。そこゝの軒の柱看板が風にあふられてがたごと動いてゐる。

次に老婆を考へてみる——

六十を二つ三つも越えてゐるらしい、赤黒い顔には深い皺がたゝみ、腰も稍々曲つてゐる。薄いつぎはぎの着物をつけて襟巻一つしてゐない。白髪がいたゞしく寒い風に亂されてゐる。手をひいてくれる子供も孫もないのか、それともどこかへ奉公にでも出てゐるのか、一本の竹の杖をたよりに人波にもまれながら、しよんぼり途方にくれてゐる。

かうしたことを先づ最初に頭に入れて置くと、この情景がはつきりする。

一體この韻文は、老婆の困憊してゐる樣や、態度や、往來の模樣や、小僧の親切振や、下駄屋の人々の言動などを眺めてゐた第三者が作つたもので、しかもその事件をありのまゝ客觀的に描いたものである。勿論『年の若きに感心な』と、そこらの人人が感心したと同樣に、この作者も小僧に對する感激が、この歌を作る契機となつてゐるが表面は終始客觀的の態度を見せてゐる。この種の詩にあつてはさうした態度は極めて有効である。『國に母をや殘すらん、彼のまぶたにつゆありき。』これだけは作者の想像であるが、あつさりしてゐるところに含蓄がある。

米屋の小ぞうお得意へ
米を運びし歸り途、
ひらりと下りて自轉車を
角の下駄屋へあづけ置き、
すぐに老婆をみちびきぬ。

『おや、氣の毒なこと……』と思つた瞬間、彼は既に自轉車から飛び下りてゐた。飛び下りなりすぐ『どうも濟みませんが一寸……』と、自轉車をあづけ、急いで引きかへし老婆の手をひいてやる。氣轉のきくきびゝしした動作、潑溂とした元氣、しかも一方なさけ深い少年の姿を思はせる。『ひらり』『すぐに』が利いてゐる。『面倒くさい』とも、『汚い着物だ、手だ。』とも思つてゐない。『おや』と氣付いた瞬間、もう飛び下りてゐる。何の遲疑もない、逡巡もない。そこに尊い人情美がある。高貴なものには努めて接近したがる世の中である。この小僧の行爲には『身なりいやしき老婆には、手をかす人もあらざりき』といふ前聯の一句と對照的

に感激を深からしめてゐる。

更に小僧の行爲は次の節に至つて、ます〳〵美しく尊いものにされてゐる。卽ち彼は、老婆を向側まで連れて行くと、老婆のお禮をいふ暇もなく素早く自轉車に乘つてしまつた。それは『年の若きに感心な、かくいふ聲をあとにして』の一句がよく物語つてゐる。彼は見得坊でやつた、ことではない。人として當然爲すべきことであるからとの理窟から割出したことでもない。かうすれば國の母もまた救はれようからといふ因果應報的の打算でもない。人が賞めてくれようからといふ利己でもない。その人格の尊さにこのうたのねらひどころの中核があらう。

最後の一聯はなくもがなである。『負ふた子に敎へられた』自責の念とでもいつたものを加へた積りであらう。が、この餘りに見えすいた敎訓は、かへつてこのうたのうるほひと奥行を減殺してゐる。

用語は雅俗混淆で、文語文から口語文への過渡の產物として特に試みたといふ編者の意見であるが、大して價値のある試みではない。やはり常用語でやつて欲しい。

二、指導の實際

第一時

1 默讀
2 文字及び語句の研究
3 小僧さんの身の上、生ひ立ちの想定
4 場所の想定
5 朗讀・アイムーヴメント指導
6 各聯の大意
7 朗讀・エキスプレッション指導
8 感想發表

第二時

(一) 默讀二三回
(二) 朗讀・エキスプレッション指導・範讀。

註

アイムヴメント (ehc-movcnt) 眼の律動の意で、語を一團として意味を考へながら讀ませること。

エキスプレッション (expr(ssion,) 感想の表白表明、表情、發意、感情を加へて眞味を發音に現はすこと。

(三) 各聯の意味を話させる――想像をも加へて――

例

1 雪どけのぬかるみ道を、杖にたよつてとぼ〳〵とやつて來た老婆がありました。ところが町の眞中で車や馬がひつきりなしに往來してゐるので、どうも向ふ側へ行くことが出來ないで困つてゐました。

2 お婆さんの前や左右をすれ〳〵に行きかふ男女は實に澤山ありましたが、しかし北風の吹きあれる寒い町の辻で困りきつてゐるお婆さんをかまつてやる人はひとりもゐませんでした。

3 ところがそこへ、お得意先にお米をはこんで歸つて來た米屋の小僧が通りかゝつて、これを見るなりひらりと自轉車から飛び下りて、車を角の下駄屋にあづけて置いて、お婆さんを向ふ側へ連れて行つてやりました。

4 『まあ、年の若いのに似ず感心なことだ。』と、人々が話しあつてゐるのには一向頓着なく、小僧さんは自轉車にのつて走り去つてしまひました。あの小僧さんにも田舍にこのお婆さんのやうな年とつたお母さんでもゐるのでせう

か。目に一ぱい涙をうかべてゐたところから考へますと……

5 小僧さんが自轉車をあづけたその下駄屋では、お客も店の者も皆『さとすべき子にさとされた。』と、後悔しながら後姿をいつまでも見送つてゐました。

(四) 朗讀

(五) 質問

1 老婆はなぜ向ふ側へ行きかねたか。

2 どんな人達が通つたか。

3 その人たちはどうして手をかさなかつたのだらう。

4 米屋の小僧はどうしたか。

5 老婆はどう思つたゞらう。

6 それを見た店の人はどういつたか。

7 小僧さんはどうして目に涙を浮べてゐたのだらう。

(六) 範誦

(七) 質問

1　作者は誰だらう。
2　このうたを作つた動機は何か。
（八）この事件、この歌に對する感想を發表させる。

第三時

1『小僧が老婆を助けた心持』『噂してゐる人々の心持』を中心として一層内容を深める。
2　歌詞の形式上の吟味、
3　補充文の提供、
4　改作・應用練習・その他、

その九　今日　（國讀卷九）

ふけ行く夜のしづけさよ。
あらゆるもののはやみといふ
黒きとばりにおほはれて、
安き眠に入れるなり。

ひとり目ざむる古時計。
夜をいましむる夜まはりの
柏子木のごとかち〳〵と、
さびしく時をきざみ行く。

きざみ〳〵て、明方の
鶏鳴けば、夜のとばり
しづかにあきて、ほの〴〵と
東の窓はしらみたり。

よき日は明けぬ、さわやかに。
朝日は出でぬ、花やかに。
いざ、起き出でて、勇ましく
我もはげまん、今日の業。

一、教材について

夜から朝までの事象の變化を、刻々に移り行く時間を追ふてうたつたものである。一と二は夜であり、三と四は朝である。しかもねらひどころは『いざ起き出

でて勇ましく、我も勵まん今日の業。』といふ、明け放れた今日の一日を祝福し、希望に充ち滿ちた心で迎へるところで、『今日』といふ標題によつてもそのことは容易に肯ける。

まづ『更け行く夜のしづけさよ』と、うたひ出してゐる。

車馬の響も絶え、人の聲も聞えず、厩で馬のあがきもしなくなつて、靜に〳〵夜が黑い帳に包まれて行く、この靜謐はやがて後段の活氣の充ち滿ちた活動の世界を描出する伏線である。『更け行く夜』は、『更けて行く夜』で『更けた夜』ではない。

夜はます〳〵しづかに更けて行く。たゞ一つの古時計がかち〳〵とかすかなそれで實にはつきりとした金屬的の響をもつて、靜寂の行進曲を奏でてゐる。特に『古時計』といつたのは、家の有樣を想像させる上に、又『靜寂』『淋しさ』などを一層强く感ぜしめる上の効果を豫想したものであらう。この萬籟寂として恰も死の如きしじまをつゞけた宇宙は一見、何等爲すことも思ふところもないやうでありながら、しかしそこにはやがて花やかに活動せんとする見えざる力が、來る日に戰はんとするエネルギーの姿が想像させられる。

二と三との歌の間には、かなりに長い時の隔りがある。一番鷄が鳴く、つゞいて二番鷄——夜の帳はする〳〵と切つて落される。ほの〴〵と窓に射す黎明の光。はち切れさうな意力に燃えた大自然が、悠々と偉大な姿を浮べてくる。

窓の外をもう一臺二臺の車が通る。どこかで、『おーい』と呼ぶ聲がする。

そのうちに夜は明け放れる。

よき日は明けぬさわやかに
朝日は出でぬ花やかに

見よ。山を、杜を、川を——金色の朝日に映え出た晴々しい姿を、今將に全活動に入らんとする一瞬間の莊嚴を、暗黑から解放された更生の歡喜を、

いざ、起き出でて、勇ましく
我もはげまん、今日の業

光榮ある一日を迎へたよろこび、高らかなうた聲、フーッと大きな息に胸を張つ

てガバと蒲團を蹴つて飛起きる。『あゝ、夜があけた。何といふ有り難いことだ。何といふ嬉しいことだ。希望と力に滿ちた今日よ、さあ働かう〳〵。』將に奮闘の門出に立つた朝の意氣をねらつたものである。

が、總じてこの歌は『今日』といふ題目にはしつくりしてゐない。といふ理由は、夜の叙述が長々と續けられて末聯に至つて、それも眞に教訓的押賣の見えすいた文字が羅列されてゐるだけである。

黄金色の日がなくなると
閉ぢられた門の中に
子供も庭も花も太陽も
あらゆる生物が消える
暗い影が來て
光が消えると
夜の幕のかげに

それらはみんなかくれて見えなくなる
庭は暗くなり、ひな菊は閉ぢ
子供は寢床にねむり
土螢は路のわだちに
はつか鼠は屑の中にねむる
暗の中に家々は輝き
兩親は蠟燭を持つて動き
すべてのものに夜はふけて
綠やばら色になる
それがすつかり、かくされてあつたのが
まるで手品のやうに
こゝに私はあけゆくまゝに

あかるい空の下にそれらを見る

どの道もどの場所も
ばらのどのむれも
どの青い忘れな草も
みな露を宿してゐる

『起きろ向ふの樂しい谷の上に
朝はやつて來た
私たちは朝の太鼓をならしませう
友達よ、みんないつしよになつて』と彼は叫ぶ

これはロバート・ルイス・スチブンソンの『夜と朝』と題する詩であるが、本課の歌もこれと類似の境地を取扱つたもので、題目からいへば『夜と朝』の方がむしろ適切であらう。

とはいへ、我々は國語讀本全體の韻文を通じて、この『今日』といふタイトル——表題——に關して至極兒童に適切なものゝ一つに考へてゐる。希望に燃え、活氣に充ち溢れた彼等が、『今日』といふ一日を禮讃し、祝福し、有意義に過さうとすることは當然であり、且又彼等のもつ眞實の生活でもある。したがつて要求するところは、『今日』といふ題名の下に、より潑溂とした藝術作品を採錄して欲しいことである。

二、指導の實際

(一) 默讀——意味を考へながら——

(二) 何をうたつたものか。

(三) 朗讀二三回

(四) 問答

1 いつからいつまでのことをうたつてあるか。

(兒) 夜から朝までです。

(兒) 十一時頃から、太陽が山の端にのぼりきつたころまでです。

2 夜のうたは、夜のどんな點をうたつてあるか。

(兒) ふけゆく夜の靜な有樣です。

3 朝のうたは？

(兒) 朝のよろこびです。

(五) 語句の吟味

(六) 問答

1 『あらゆるものは』どうしたか。

(兒) 『安き眠』に入つた。

2 どんな具合にして？

(兒) 『黒きとばりにおほはれて』

3 その『とばり』は何をいつたものか。

(兒) 『やみといふ』とばりです。

——板書——

やみといふ(黒き)
とばりにおほはれて
あらゆるものは——→安き眠に入れるなり

4 次の關係を質問しながら板書。

夜をいましむる夜まはりの
拍子木のごと
かちかちと
さびしく
ひとり目ざむる
古時計——→時をきざみ行く

(七) 朗讀指導

第二時

1 各聯毎の吟味

2 『今日』といふ題をつけた理由の考察
3 感想發表
4 補充文の取扱
5 改作・應用練習・その他

その十　霧（國讀卷十）

しら〳〵と、朝霧　野山をこめて、
月のごとく、日輪　ほのかに浮ぶ。
野路を行く人影　たゞちにきえて、
けたゝまし、もずの音、こずゑはいづこ。
谷間よりはひ出で、木の幹ぬらし、
しら〳〵と、おぼろに　朝霧流る。

しめやかに、夜の霧　ちまたをつゝみ、
立並ぶ家々、ともしびうるむ。
影のごと、人去り　人來る大路、

ほろ〳〵と聞ゆる　笛の音いづこ。
窓ぎはにはひ寄り、ガラス戸ぬらし、
しめやかに、ひそかに　夜の霧流る。

一、教材について

霧の美をうたつたものである。霧の持つ朦朧の美、靜けさのもたらす美を取扱つたものである。一の歌は夜が明けて太陽が東の山の端に出初めた頃である。作者は庭先か二階の縁側にでも立つてゐるのであらう。そこは四方山に取圍まれた所謂山村で、家の直ぐ後は山になつてゐる。前はかなりに廣い田圃を隔てゝ連峯が起伏してゐる。その山と山との間には美しい谷川が潺湲と流れ、山裾には點々と人家が散在してゐる。かうした山里の朝霧の叙景である。二の歌は、夜の霧である。しかし夜といつても、餘りに更けてはゐない。夕暮時の喧騒さが一先づ落着いて、漸く靜けさに入り始めた八時か九時頃であらう。場所は一の歌とは異つて都會である。これは『立並ぶ家々』『人去り人來る大路』『ガラス戸ぬらし』などの文句から想像し得られる。しかし自動車の爆音がひつきりなしに聞え、汽

車・電車が絶間なく通るといつた様な大都會の眞中ではない。作者は矢張りこの町が見通される家の二階か、又は大通りにでも立つてゐるものと想定される。

一は山村、一は都會、一は朝霧、一は夜霧であつて、歌はれてゐる場所・時刻を全く異にしてゐる。したがつて作者も亦異るものと考へられないこともないが、しかし同一作者がその内容と體驗を異にしたものと見做すのが妥當であらう。

この歌は、九七の定型律と見るよりも、五四四三の音數律を繰返したものとする方が、壯重な内容とより合致するやうである。卽ち

しら〳〵と(五)　朝霧(四)　野山を(四)　こめて(三)　月のごと(五)　日輪(四)
ほのかに(四)　浮ぶ(三)　野路を行く(五)　人影(四)　たゞちに(四)　きえて(三)
けたゝましし(五)　もずの音(四)　こずゑは(四)　いづこ(三)　谷間より(五)
はひ出で(四)　木の幹(四)　ぬらし(三)　しら〳〵と(五)　おぼろに(四)
朝霧(四)　流る(三)

このことは又朗讀に際しても、『しら〳〵と朝霧』『野山をこめて』と、九七調でなく、『しら〳〵と』『朝霧』『野山を』『こめて』か、或は『しら〳〵と』『朝霧』『野山をこめて』とか讀むべきである。

落ち着いた纖細な歌ひぶりである。霧をなつかしみ、霧を愛でる情緒がほそぼそと糸のやうにつゝましく流れてゐる。相當高く買つてよい作である。

二、指導の實際

第一時

1　文字面の讀方指導
2　默讀による内省
3　詩境の整理
イ、うたはれてゐる時
ロ、作者の位置
ハ、うたはれてゐる場所

二、うたはれてゐる光景

4　通讀

5　難語句の吟味

第二時

(一)　通讀三四回

(二)　問答

1　一と二のうたにうたはれてゐる主なる内容をあげて見よ。

―――板書―――

朝霧

a　しら〳〵と、おぼろに流る

b　月のごと、日輪　ほのかに浮ぶ

c　人影　ただちにきえて

d　けたゝましもずの音

夜の霧

a　しめやかに、ひそかに流る

b　ともしび　うるむ

c　影のごと、人去り　人來る

d　ほろ〳〵と聞える　笛の音

2　朝にしろ夜にしろ、霧そのものにはさう大差ない筈であるのに、斯樣に異つた感じを與へるのは何故か。

(兒)　霧は同じでも、作者の見方がちがふからです。

(兒)　作者の心持がちがつてゐるからです。

3　朝の霧からは、作者はどんなことを感じてゐるか。

(兒)　つめたさです。

(兒)　落ちついてはゐるが、どこか朗かなところ、明るいところがあります。

(兒)　あけ行く朝の希望のある、そしてあはたゞしさといつた感じもあります。

4 それらのことは表現のどこに求められるか。

(兒)『しら〳〵』とには冷たさ、明るさは『日輪ほのかに浮ぶ』に、あはたゞしさは『たゞちに』『けたゝまし』などからです。

5 夜の霧から、作者はどんな美を感じたか。

(兒) どこか暗い靜けさです。

(兒) しみ〴〵としたなつかしさがあります。

6 そのなつかしい氣持は表現のどこから氣づいたか。

(兒)『ともしびうるむ』『ほろ〳〵と聞ゆる笛の音』などです。

7 作全體を通じて、作者は霧のどんな美を歌はうとしたか。言ひかへると『朝霧』『夜霧』の二聯を通じて共通な氣持は何か。

(兒) あらゆるものをぢつと包んだ、靜かな落ちつきです。

(三) 朗讀二三回

(四) 問答

1 霧の靜けさを破つたものは何か。

(兒) 朝の霧では『もずの音』、夜の霧では『笛の音』です。

2 これは單に場所の相違から來た自然のちがひであつたとだけ考へてもよいか。

(兒) 事實、朝はもずが鳴き、夜は笛の音だけがきこえて來たかも知れないし、まだこれ以外の音がしたかも知れません。が、作者はその時の自分の氣持にもつともよく合つた材料を選んだと考へるが一番よいと思ひます。

3 その時の氣持とは、どんな……

(兒) 明け行く朝の希望とか、力强さとかを感じた作者には、もずのあの力强い聲がもつともその氣分にふさはしく、しみ〴〵となつかしい氣分には笛の音がぴつたり合つたのだと思ひます。

(五)『日輪』とか『ともしび』についてもさうしたことが言ひ得られる。選ばれた材料を朝と夜と比較しながら默讀して見よ。

(六) 範誦

(七) 謄寫刷の左記補充文を與へて、本課と比較對照させる。

あさぎり

ほのじらむ朝あけの
水に音ない泊り舟。
霧にほの透く並藏の
城のやうにも靜かなる、
どこかきく鳥のこゑ
迷ふ鷗か、朝ぎりの上潮どきに。

白日の霧

峠の上に立つてゐると
大空の中を往來する
白日の霧が
雪の斷片のやうに

走つてくる
霧につゝまれたかと思ふと
もう脱けてしまつた
水の中から出たやうに
半身はひやゝかに
袖寒く
雨でもなく露でもなく
水の雫が
木の繁みから落ちてくる
山は晴れわたつて
暗い蔭は少しもないが
何處からともなく
一團また一團
走つてくる霧の迅さよ

その十一　孔明（國讀卷十二）

白雲いう〳〵去り又來る。
西窓一片殘月あはし。
うき世をよそなるしづけき住居、
出でては日毎畑を打ち、
入りては机に書をひもとく。

雪降りみだるゝ冬のあしたに、
風なほ冷たき春のゆふべに、
劉備が三顧のこよなき知遇、
我が身をすてゝ報いんと、
起ちてぞ出でぬる、草のいほりを。

天下を定むる三分の計、
たなそこの上に指さすがごと、
いしずゑ固めし蜀漢の國、
漢中王はおごそかに
帝の位をふませ給ひぬ、

二代の帝に盡す眞心、
强敵ひしぎて世をしづめんと、
三軍進めし五丈原頭、
はかなく露と消えしかど、
其の名はくちせず、諸葛孔明。

一、教材について

兎に角厄介な教材である。孔明が三顧の知遇に感激して、身を南陽の草廬に起し、劉備を助けて遂に蜀漢の國を興し、『之を見て泣かざるは人に非ず』と迄その赤誠に感歎せしめた出師の表を奉り、五丈原頭に出でては死して後なほ仲達を走らせたといふ稀代の忠臣謀將の心事をうたつたものであるが、それを鑑賞の域に達せしめることは容易ではない。第一このうたの背景となすべき事實そのものを理解させるだけでも頗る難事である。『當時の支那の狀態』『孔明の經歷人格』を會得させ、更に例へば『三分の計』とか『三顧の知遇』といつた個々の內容を明にして、しかもこのクラシカルな漢文調の表現をとほして鑑賞作業に入らうとするこ

とは思つただけでもうんざりさせられる。これは第一教材の程度に難がある。由來叙事詩は詩的價値の低劣なものと一般的にされてゐるが、それは別としても、かゝる素材をこの學年程度に韻文の形式で與へようとするところに無理がある。したがつて、實際取扱においては、事蹟事業の大要を知らせつゝ表現の意味を理解せしめる位が關の山になるであらう。

二、指導の實際

第一時

1 豫備的說話
2 教材の提供
（難語句の意義や叙述內容について下調をさせる）
3 讀方指導
4 大意問答（一つづの歌について）
5 文意の把捉

第二時

(一) 讀方練習
(二) 各聯の意味を發表させる。
（例）
一の歌 —— 白雲は悠々と往來し西の窓を開くと、有明月がほんのりとあはく浮んでゐる。こんな淸らかなところに孔明は住つてゐて、毎日晝間は外に出て畑を耕し夜は机によつて書物にしたしみながら暮してゐた。
二の歌 —— 雪が降りしきる冬の朝、又ほそ〳〵と風の冷たい春の夕を劉備は三度もその住家を訪ねた。かやうな知遇に感激した孔明は、我身を捨てゝこの恩に報いようと强い決心をもつて草の庵を出た。
三の歌 —— 孔明が立てた三分の計は、ちやうど掌の上のものを指すが如く、確實にしかも着々進められて、蜀漢の國礎は固くきづかれ、劉備は漢中王となり、次いで帝王の位についた。

四の歌――劉備・劉禪の二代の帝に眞心をもつて仕へ、更にその志を繼いで强敵曹操をひしいで世の中を鎭めようと、大軍を率ゐて五丈原頭に戰つたが、たうとう陣中にはかなく死んでしまつた。しかしその『諸葛孔明』の英名は、何時までも朽ちずして語り傳へられてゐる。

(三) 一つ〳〵の歌について、語句を確め、事實の補說を加へ、それを表現と結びつける。

白雲いう〳〵去り又來る
西窓一片殘月あはし
うき世をよそなるしづけき住居
入りては机に書をひもとく
劉備が三顧のこよなき知遇
起ちてぞ出でぬる草のいほりを
天下を定むる三分の計
たなそこの上に指さすがごと

いしずゑ固めし蜀漢の國
漢中王はおごそかに
二代の帝に盡くす眞心
强敵ひしぎて世をしづめんと
三軍進めし五丈原頭
はかなく露と消えしかど

(四) 朗讀三四回――教師の範讀を交へて――

(五) 問答

1 孔明はいつ頃の人か。
2 その頃支那の有樣はどうであつたか。
3 一の歌はどこのことをいつたものか。
4 白雲いう〳〵云々は何をいつたものか。(南陽の閑居)
5 うき世をよそなる云々は？ (晴耕雨讀)
6 二の歌は何をうたつたものか。(三顧の知遇)

7 劉備はどうしてそんなに孔明をほしがつたか。（臥龍の勢）
8 孔明と劉備の關係は？（水魚の交）
9 三の歌は何をうたつたものか。（三分の計）
10 三分計といふのはどんなことか。

三國鼎立
魏——曹操
呉——孫權
蜀——劉備

11 四の歌は？（五丈原頭）
12 この詩を讀んでどう思ふか。

（六）朗讀三四回——教師の範讀を交へて——

第三時

1 文意の確認
2 鑑賞味讀

3 感想の發表
4 改作・應用練習
5 補充文の提供
1 諸葛孔明（尋常小學讀本）
2 五丈原（土井晚翠『天地有情』）

その十二　鳴門（國讀卷十二）

阿波と淡路のはざま海は、
此處ぞ名に負ふ鳴門の潮路。
八重の高潮かちどき揚げて、
海の誇のあるところ。

山もとゞろに引潮たぎり、
たぎる引潮あら渦を卷き、
卷いて流れて流れて卷いて、
空にとびたつ、潮けむり。

裸島より渦潮見れば、
胸も波だち眼もくらむ。
船頭勇ましし、此の潮筋を
落し漕ぎゆく、木の葉舟。

一、敎材について

鳴門海峽の奇觀をうたひ、その壯美に感じ到らしめようとしたものである。一は鳴門の大觀である。先づ『阿波と淡路のはざまの海は』と、その位置を明にし、『八重の高潮かちどき揚げて』と、壯觀を仄かし、『此處ぞ名に負ふ鳴門の潮路』と、その天下に有名なことを紹介してゐる。『海のほこりのあるところ』は、前句とのつながりにおいて、語感において、稍々生硬であり不自然であり陳腐である。今少し生氣のあるしかも該切な表現が望ましい。二は大潮時の引潮の光景を叙述したもので、その壯觀を聽覺視覺に訴へてゐる。技巧においては、『引潮たぎり』を承けて『たぎる』と置き、『卷き』を承けて『卷いて』と据ゑ、更にそれを承けて、『卷いて流れて流れて卷いて』と繰返したところなど、自然的な連鎖と快調をもたせて、民謠

風な味を滲出してゐる。三の歌は裸島からの眺めと、船歌の勇ましさをうたつたものである。『裸島より渦潮見れば、胸も波立ち眼もくらむ……』と、何處までも民謠調である。こゝでたゞ慾をいへば、『胸も波立ち眼もくらむ』が些か平凡である。最後の『船頭勇まし……』は力强い表現で、しかも亦多くの情景を含蓄した句で、所謂本詩の畫龍點睛である。逆卷く渦の眞つたゞ中を、鉢卷姿かひ〴〵しい船頭が、飛鳥の如く櫓をあやつりながら、押し切つて行くその勇壯な情趣が、一聯二聯と單なる叙景で進んで來たこの韻文に、突如壯快な人情美を加へて景情兼ね備はるものとしてゐる。全體を通じて『七七』『七七』『七七』『七五』の三聯から成立した、齒切れのよい壯快なうたである。一句一語への不滿や、民謠調の氣安さに一致しない固苦しいところもないではないが、總じて明るく强いタッチで押し通した好ましい歌である。

二、指導の實際

第一時

1 通讀
2 鳴門の地理的說明
3 鳴門の壯快な有樣を大要說話する。
4 各聯の節意
5 詩意の把捉
6 挿畫の取扱

第二時

(一) 通讀

(二) この歌は鳴門のどんなところを狙つたものか。

(兒) 勇壯な有樣です。

(兒) 壯觀です。

(三) その壯觀を表はすために、どんな點を採り上げてあるか。

(兒) 渦まいてゐることゞどう〳〵と音を立てゝゐること、潮けむりをあげてゐることなどです。

(四) それらの箇所を拾ひ出して見よ。

八重の高潮かちどき揚げて
たぎる引潮あら渦を卷き
卷いて流れて流れて卷いて
胸も波だち眼もくらむ
船頭勇ましこの潮筋を
落し漕ぎゆく木の葉舟

(五) この詩を讀んでどんな感じが起るか。

(兒) 勇壯です。

（兒）爽快です。

（兒）すごみの加つた爽快さです。

（六）朗讀　――教師の範讀も交へて――

（七）表現上感心した個所をあげて見よ。

（兒）二聯の一行に『たぎり』と歌つて、次に二行の始めを『たぎる』と受け、『卷き』『卷いて』とつゞかるところです。

（兒）『落し漕ぎゆく木の葉舟』も面白いし、第一この渦卷の中へ木の葉舟を持つて來たところがよい。

（兒）全體よく引きしまつてゐて無駄がないと思ひます。

（八）詩の形について調べたことをいつて見よ。

（兒）大體七七調から成つてゐるが、最後に一つ七五調を交へてある。

（兒）七七は三四・四三のなだらかな調子から成つて、それに輕い滑らかな七五調を加へて、一層なだらかなものにしてゐる。

（兒）七七に七五が加はつてゐるので、はやり歌でも聞くやうないゝ氣持がする。

る。

（兒）七七調の三四・四三をたゝみかけて、最後に七五で輕く結んだところがたまらなくいゝ。

（兒）七七・七七・七七・七五の調子が渦卷き流れる鳴門の氣持にしつくり合つてゐる。

（九）三聯のうちを比較するとどれが一番氣持が出てゐると思ふ。

（兒）二と三です。

（兒）二が一番いゝ。

（兒）僕は三がいゝと思ふ。

（理由をいはせる）

――討議――

（一〇）一はどこがいけないだらう。

（兒）鳴門の紹介になつてゐるから、

（兒）説明が多いから、

（兒）前の二句と後の二句の調子が合つてゐない。

（兒）いやに氣取つてゐるのがいけない。

（二）讀誦　――範讀を交へて――

――（本項終り）――

讀方教育原論

終

昭和七年五月十日　初版印刷
昭和七年五月十五日　初版發行

讀方教育原論（奥付）

定價金四圓八十錢

著作者　東京市外戸塚町戸塚九六一番地　友納友次郎

發行者　東京市京橋區入舟町五丁目一番地　藤原惣太郎

印刷者　東京市京橋區入舟町五丁目一番地　葛原秀一

檢印

發行所　東京市京橋區入舟町五　振替東京一八五一三番　明治圖書株式會社

賣捌所　東京　株式會社　林平書店　大阪　合資會社　柳原書店
名古屋市　合資會社　川瀨書店　久留米市　菊竹金文堂　佐賀市　大坪惇信堂

ㅗㅏ5T-14

終